

〈研究ノート〉

## インド・カースト制度と仏教再興運動

Indian caste system and the Buddhist revival movement

國井 哲義<sup>1</sup>

### 要 旨

本稿はインドのナグプール、ムンバイ、ジョドプール、ジャイプールにおける不可触民の生活実態と仏教再興運動の現状を、現地での聞き取りを基に論述したものである。インド社会の変貌とカースト制度の揺らぎを現地から報告する。

キーワード：不可触民, アンベードカル, 経済発展, 佐々井秀嶺, カースト制度の部分的崩壊  
untouchables, Ambedkar, the economic development, Sasai Syurei, the partial collapse of the caste system

### はじめに

全国大学同和教育研究協議会は今年（2015）3月21～31日に、第8回インド・カースト制度現地研修を行なった。参加者は筆者を含め12名で、旅のテーマは「インド・カースト制度と新仏教」であった。旅の主な目的は、具体的には経済発展が著しい今日のインドで、カースト制度がどのような変貌を遂げているか、とくにアウトカーストと呼ばれる最下層の不可触民の生活実態はどうか、解放運動の中で新仏教（アンベードカル主義）がどのような役割を果たしているか、などを現地で見極めてくることであった。

本稿は、今回の旅で訪れたマハーラーシュトラ州のナグプール、ムンバイ、ラジャスタン州のジョドプール、ジャイプールなどの被差別地区で見聞きしたことの報告と筆者の感想である。

### 1. 今回の旅でとくに印象深かったこと

筆者にとっては、今回のカースト制度現地研修は7回目になるが、訪れるたびにインドの変貌ぶりに驚かされる。バスで目的地を訪れることが多かったのだが、いたるところ車の洪水で、都市部ではしばしば渋滞に巻き込まれた。おそらく大半は個人所有の車であろう。かつてのインドでは考えられなかったことである。これも1991年の経済開放以後の

爆発的な経済発展の結果であろう。



図1 デリー近郊の渋滞

路上駐車している車が多い。3車線のうち2車線分が駐車スペースに使われている、いわゆるダブル駐車もよく見かけた。交通渋滞の大きな原因が、増え続ける車と路上駐車にあることは間違いない。

ガイドのチャウラー氏に聞くと、車を購入する際にインドでは車庫証明が要らないのだそうである。当然のことながら購入された車の多くが路上に駐車されることになる。路上の車の多くは、専用の車庫を持たない車なのであろう。おそらくだれもこれほど急激に車が増えることを予想していなかったのだろうが、このままでは、車での移動は都市部では早晩不可能になるのではないかと。デリーなどでは、あちらこちらで建設中の地下鉄の工事現場も見たし、さまざまな渋滞解消の努力はなされているのだろうが、路上駐車そのものを少なくする法律の整備がまず必要なのではないだろうか。

ダブル駐車の場合、歩道側の車は右側の車が動かない限り出られなくなるが、その場合、歩道側の車のドライバーはどうするのかとチャウラー氏に尋ね

1 Tetsuyoshi KUNII 千里金蘭大学 生活科学部 食物栄養学科

受理日：2015年10月15日

ると、ただぶつぶつと文句を言うほかないのだそうである。だれもが現状にはお手上げで、有効な解決策がないということなのだろう。

バスでデリー近郊を走っていたとき、高層アパートが林立している地区が見えた。しかもそのような地区が幾つもの何キロにもわたって延々と続くのである。以前のインドでは見られなかった光景なので、インド経済も発展したものだと思心して見ていると、どうも様子がおかしい。ほとんどのビルの建設工事がストップしているのである。人が住んでいる気配もまったくない。

チャウラー氏に尋ねると、不動産バブルが崩壊して軒並み工事がストップしているとのこと。いつごろバブルが崩壊したのかと尋ねると、2年ほど前(2013年)だという。

かつて経済成長が著しい新興国はBRICS(ブラジル、ロシア、インド、中国、南アフリカ)と呼ばれ、近い将来経済の規模で先進国を追い抜くのではないかともいわれていた。しかし今では軒並みバブルがはじけて経済不振に陥っているが、偶然にもその現実をインドで目の当たりにすることになったのである。おそらくバブル崩壊後の日本がそうであったように、これらの国々も不良債権の山に苦しんでいるに違いない。山が高ければ谷は深いのである。日本経済もかつて不良債権問題に苦しみ、失われた20年といわれる経済の停滞を招いたが、これらの国々が再び成長軌道に乗れるのはいつのことだろうかと思わずにはいられなかった。

## 2. デリーからナグプールへ

われわれは関空からまずデリーに飛び、空港近くのホテルで短時間の仮眠を取った後、早朝空路ナグプールに向かった。実はわれわれがインド新仏教の聖地、ナグプール行きを計画したのは今回が初めてではない。前回の現地研修(2011年)の最初の計画でも、ナグプールは第一の目的地だったのである。その計画では、まる1日車に乗ってナグプールに向かうことになっていた。しかし年配者や健康に不安のある者にとっては、あまりに過酷なスケジュールだとの意見が寄せられて、ナグプール行きそのものを断念した経緯があったのである。しかしなんと今回の旅では空路で行けるのだという。おそらくこの4年のうちに、インド全体で飛躍的に国内航路と空港が整備されたに違いない。

ナグプールの空港は目を見張るほど近代的な空港であった。なんと「アンベードカル国際空港」と名づけられている。おそらく市当局には、この地がアンベードカルの仏教改宗式が行なわれた新仏教の聖地だということをも地域発展の原動力にしようとの意図があるのだろう。

滞在したホテルも立派で、快適であった。私の最初のインド訪問(97年)当時のホテルとはすべての点で比較にならない。聞けば、空港もホテルもすべてここ10年ほどの間に建てられたものだそうである。すでに述べたように、今では一時期のバブル状態は収束しているものの、インドの爆発的経済発展の実例をここでも見ることになったのである。

## 3. インドラ・ブッダ・ヴィハーラ (Indora Buddha Vihar) 訪問 (3月22日)

3月22日、われわれは早朝にデリーを発ち、ナグプールに7時過ぎに到着した。早速チャーターしたバスで、佐々井秀嶺氏が住み、活動の拠点にしているインドラ・ブッダ・ヴィハーラを訪れた。ちなみにインドラは地名、ヴィハーラは僧院の意味である。あいにく佐々井さんは不在であったが、書記のアミット氏(Amit S. Gadpale)をはじめとする方々から大歓迎を受けた。7~8名の方が聞き取りに応じてくれたが、とくに印象的だったのは、彼らの佐々井氏に対する深い尊敬と信頼の念であった。彼らのひとは「佐々井氏は、われわれが忘れていた仏教を教えてくれた」と語っていた。不可触民として差別を受けながら、長年その差別に甘んじて暮らさざるをえなかった改宗前の生活、改宗してから仏教徒としてコミュニティーをつくり、お互いに支え合いながら胸を張って生きている今の暮らし、おそらく佐々井氏から仏教を教えてもらったという彼らの言葉には、そのような思いがぎっしりと詰まっているに違いない。



図2 僧院の内部

この僧院の中には図書館が設けられており、若者たちが学習に励んでいた。コンピュータに向かっている若者もいる。扱い方を若者たちに教えて、将来

の就職に備えているのだという。これも被差別民が豊かになるための、生活改善運動の一部なのである。

僧院の1階にある図書館で学習していたのは、男子のみであった。女子はどうしているのかと尋ねると、別のところで学習しているのだという。実はこの僧院の近くに新しい3階建ての僧院が建築中で、その1階に女子のための図書館スペースが設けられており、数人の女子生徒が自習に励んでいた。学習の際にも、このように男女を分けるのがインドでは一般的なのであろう。なぜ男女を分けるのか聞いてみると、このほうが勉強に集中できるから、という答えが返ってきた。

われわれが訪れたとき、たまたま僧院の大広間で結婚式が行なわれており、十数人の新郎新婦の親族と思われる人たちが正装して座っていた。仏教に基づいて結婚式が行なわれるのだという。大広間の正面にはアンベードカルの像が安置されていた。おそらく新郎新婦はこの像の前で夫婦としての誓いを立てるのであろう。

この地区全体が仏教（アンベードカル主義）に基づいてコミュニティーをつくっており、その中心に僧院があるのだろう。ここで住民への布教から冠婚葬祭などの生活上の諸行事や住民同士のトラブルの相談に至るまで、さまざまな活動が行なわれているのであろう。そして佐々井氏は僧院の代表であるだけでなく、このコミュニティー全体の指導者として住民全体の生活に深く関わっているに違いない。僧院と周辺のコミュニティーを案内してもらいながら、強くそのような印象を受けた。

#### 4. インドラ・ブッダ・ヴィハーラでの聞き取り

インド全体でどれくらい仏教徒がいるのか尋ねたところ、1億3千万人ぐらいではないかということだった。佐々井氏が行なう改宗式はお坊さんが対象で、年に1回10月にアンベードカルがかつて改宗を行なった改宗広場（ディクシャブーミ）で行なわれているという。一般人の改宗は毎日行なわれているとのこと。だいたい年に4万人ぐらいが改宗しているのではないかという。ナグプールの仏教寺院の数は172か所で、改宗の際には寺院から書類をもらって必要事項を記入し、寺院が証明書を発行するのだという。

改宗者はほとんどヒンドゥー教からの改宗だが、

キリスト教からの改宗もあるという。ほとんどの改宗者はマハール（不可触民のジャーティ、アンベードカルもこのサブカースト出身）だが、近頃はマハール以外の人々の改宗もあるとのこと。

インドの仏教徒の数が政府の公式発表（800万人）と仏教団体で聞く人数（1億3千万人）とが大きく異なっているのはなぜかと尋ねると、面白い答えが返ってきた。政府から仏教徒として認可してもらう証明書を手に入れるのに1人2,500ルピーかかるが、それだけ払って仏教徒として認可してもらう人が少ないからではないかという。筆者のこれまでのフィールドワークでは、実際には仏教に改宗していても、政府の優遇策を受けられなくなるなどの理由で、表向きはヒンドゥー教徒のままにいる地区が少なからずあった。私は、これが仏教徒の数が統計によって大きく異なる主な原因ではないかと思う。

この地区の異宗教や異カースト間の結婚について尋ねた。かつては仏教徒の内部だけで結婚していたが、今では他の宗教の人との結婚もあるという。仏教徒の男性と異教徒の女性の結婚の場合、女性が仏教に改宗するのがほとんどだという。逆に異教徒の男性と仏教徒の女性の結婚の場合は、女性が改宗するという。女性が相手の男性の宗教に改宗するのが普通のようなのである。

#### 5. 改宗広場（ディクシャブーミ）訪問

改宗広場（ディクシャブーミ）を訪れた。この広場こそ、1956年10月14日、アンベードカルが30万人ともいわれる不可触民（主にマハールの人たち）とともに仏教への改宗を宣言した場所である。仏教はインドが発祥の地でありながら、ブッダがヴィシュヌ神の化身とされるなど、ヒンドゥー教に飲み込まれる形で衰退していた。今でもヒンドゥー教徒に尋ねると、ブッダはヒンドゥー教の神であるとの答えが返ってくる。



図3 改宗広場

つまり仏教は多くのインド人にはヒンドゥー教とは違う固有の宗教とはみなされていないのだ。アンベードカルの改宗式は、その仏教がヒンドゥー教と

真っ向から対立するカースト制度打破の宗教、すなわち不可触民解放の思想的礎としてインドの地でよみがえったことを意味しているのである。

現在、広場には立派なドーム形のバゴダが建てられ、内部の広間には阿弥陀如来像が安置してあった。タイから持ってきたものだという。天井には法輪の形をした蛍光灯が室内を照らしている。広間中央のドーム型の舍利塔にはアンベードカルの遺骨が安置されているのだという。

広間の周囲にはアンベードカルの写真が並べられていた。この広場での改宗式の模様を写したのものもある。チャンドラマニ長老の写真もある。アンベードカルの死の直後のものと思われる写真もある。わきに立っているのはおそらく、妻のカビール博士であろう。彼女はバラモン出身の医者で、糖尿病の持病があったアンベードカルを死ぬまで懸命に支えたのである。不可触民の男性とバラモンの女性との結婚は、逆毛婚としてカースト制度の中では最も忌避されていた。異カースト間の通婚こそカースト制度打破の鍵となると主張していたアンベードカルは、自らそれを実践する形になったのだ。ふたりは、どのような困難を乗り越えながら結婚生活を送ったのであろうか。筆者にとっては初めて見る写真が多く、さまざまな思いが去来した。

## 6. 佐々井秀嶺氏との出会い (3月23日)

われわれの旅に、誰ひとり予想もしていなかった幸運が舞い降りてきた。佐々井秀嶺氏（インドに帰化しており、インド名はアーリア・ナーガールジュナ）との出会いである。インドラ・ブッダ・ヴィハーラを訪問した日の夜、ガイドの川田君からにわかには信じがたい連絡を受けた。明日、佐々井氏に会えるというのである。チャウラー氏と川田君はヴィハーラと連絡を取っていたが、出張先から佐々井氏に戻ってきたのでお会いできますとの連絡を受けたという。



図4 佐々井秀嶺氏

翌日のバスの中で筆者が、「きょう佐々井氏にお会いすることになりました」と言うと、大きな拍手

が起こった。路上で待ち合わせて、佐々井氏がわれわれのバスに乗り込んできた。氏はわれわれがちゃんと連絡を取らなかったことに、少々立腹しているようだった。われわれとしては、佐々井氏のような有名人に最初から会えるなどとは思っていなかったので、連絡を取らなかったのだが、これは結果的には大変失礼なことをしてしまった。氏は昨夜遅くオーランガバードから帰ってきたのだという。

われわれがどういう団体なのかと尋ねられたので、インド・カースト制度と部落問題などを調査研究する団体ですと答えると、よくインドに入国できたのだと驚いておられた。ある団体は正直に「カーストの現地調査」と入国目的を書いたら、入国を許可されなかったのだという。筆者が「それは承知しています、われわれの旅の目的は観光です」と答えると、氏は笑っていた。

氏によれば、昨年(2014)の7月から8月にかけて病に倒れ、危機的な状態に陥ったのだという。氏は、それが暗殺の試みだったのではないかと語っていた。氏を診たのがナグプールの病院で名医との評判の高い医者だったのだそうだが、「(その)医者に殺されそうになった。看護師に助けられた」とも語っていた。筆者がネットで調べた限りでは、佐々井氏は8月初旬にムンバイの病院に転院しても、暗殺を恐れてか医師や看護師の指示を拒否するかたくな態度に終始したようである。たとえば氏は医者、点滴ができるように管を刺したいという要求を拒絶したそうである。8月初旬にはこのような危険な状態であったにもかかわらず、ともかく中旬頃には奇跡的に回復したという。

佐々井氏暗殺の計画が実際にあったかどうかは確かめようもないが、氏が今までに何度か暗殺の危険に遭ったことは事実である。氏の仏教に基づいたカースト制度廃絶の活動は、他宗派や高位カーストの人たちにとって、時として万死に値するものと見られても不思議ではない。

それから氏は、「アッハッハー」と豪快に笑いながら、ナグプールに来るまでの自らの人生を熱っぽく語ってくれた。バスの中で、エンジン音や道路からの騒音で、話がよく聞き取れない部分も多かったが、以下に聞き取れた部分を要約する。

佐々井氏はまず「日本で学校に通っていたころは、勉強が嫌いだったし、またできなかった。それで悪いことばかりしていた」と語った。氏の伝記『破天』(山際素男著、南風社、2000年刊行)の中でも、

氏は一時期『人間失格』を地で行くような非常に荒れた生活をしてたと語っている。氏がこのような話をしばしばするのは、宗教指導者にはありがちなことだが、聖人君子のように思われることを極度に嫌っているからでもあろう。

氏は次に、ナグプールに来る原因となった宗教体験について語った。話をわかりやすくするために『破天』に書かれている内容で氏の話の補いながら、この宗教体験を再構成してみる。

氏は日本で得度して、タイからインドに渡る。そこで彼の人生を大きく変える体験をすることになる。それは1967年8月、氏が王舎城ラージギルで仏塔建設の工事などに携わり、寺に泊まって、次の日に下山して帰国しようと考えていた満月の晩のことであった。夜2時ごろだったという。瞑想中に白髪の老人が現れ、氏は杖で肩をぱっと押さえられて身動きがとれなくなった。「だれです、あなたは」と叫ぶが声にならない。老人は「われは竜樹なり。汝速やかに南天竜宮城へ行け。南天竜宮城はわが法城なり。汝の法城はわが法城。わが法城は汝の法城なり。南天鉄塔もまたそこにあらんか」と語ったという。氏は恐ろしくて、「南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経・・・」と5分ほど唱えたという。

佐々井氏は、これは決して夢の中での出来事ではないと言う。「親鸞が六角堂で観音様のお告げを受けたように、オレは（竜樹菩薩を）見たんだから」と、本当に竜樹に会ってお告げを受けたことを強調していた。

『破天』によれば、佐々井氏は早速、寺と一緒に泊まっていた八木天撰上人に竜樹のお告げのことを話した。八木氏によれば、竜樹の「竜」はインドでは「ナーガ」、宮城は「プール」、合わせると「ナグプール」を意味するという。ナグプールといえば、マハラシュトラ州第2の都市で、しかも大勢の仏教徒が住んでいるところではないか。すると竜樹のお告げは、佐々井氏にナグプールに行け、というものだったことになる。

佐々井氏は、こうして竜樹に導かれるようにしてナグプールにやって来る。そこで初めて、仏教に基づいて不可触民解放運動に生涯を捧げたアンベードカル博士を知ることになる。氏は「アンベードカルのことなど、それまで聞いたこともなかった」と語った。

その後の氏の活躍は、周知の通りである。今やインド国籍をとり、ナグプールに住んで、仏教再興（不

可触民解放）運動の先頭に立っているのである。

われわれは文殊師利菩薩大寺に案内され、氏に法話をしていただいた。境内にはアンベードカルの肖像、東日本大震災で亡くなった方々の慰霊碑などが建立されていた。

われわれはこの寺の裏手のマンセル遺跡に登った。それは佐々井氏が私財と個人的に集めた資金で発掘した西暦400年頃の巨大な仏教遺跡である。公開はされていなかったが、たくさんの仏像などが発掘されたとのこと。また竜樹のものかどうかはわからないが、人骨も出てきたそうである。



図5 マンセル遺跡

さらにわれわれは竜樹菩薩大寺に案内された。それは姫路の有方静恵女史の奉納により、広大な敷地に建設された鉄筋コンクリートづくりの壮大な寺である。2010年10月18日に落慶式が行なわれ、10万人もが訪れたという。日本からも宗派を問わず多くの僧侶が参加したそうである。ちなみにネットで調べたところによれば、有方女史は、マンセル遺跡の近くに老人ホームも寄付されている。



図6 竜樹大寺と佐々井氏

佐々井氏に「日本の仏教界はこの寺の建設のためにお金を出したのですか」と聞いたところ、「1銭も出してない」との返事が返ってきた。

歩きながら佐々井氏に「ブッダガヤ（仏陀が悟りを開いた場所とされている）のマハーボディ寺院の管理権をヒンドゥー教徒から取り戻す運動はどうなっていますか」と尋ねると、すでに20年以上にわたってたたかいが継続しているとのこと。仏教の聖地であり、日本を初め世界中から多くの参詣者があって巨大な利権が絡むため、ヒンドゥー教徒も管理権をそう易々とは手放さないであろう。

## 7. アンベードカル茶毘所とアンクル・ブッダ・ヴィハーラ (Ankur Buddha Vihar) 訪問 (3月24日)

空路ナグプールからムンバイに移動して、市内を観光し、アンベードカル茶毘所(チャイティアブーミ)を訪れた。アンベードカルは独立インドの初代法務大臣を務め、現行憲法の作成に加わるなど、インド現代史に大きな足跡を残した人物でありながら、不可触民出身であったため、高位カーストと同じ場所での火葬ができなかったといわれている。どのような場所なのかと大いに興味をもって行ってみると、現在は屋根がドーム形の鉄筋コンクリート造りのパゴダが建てられていた。内部にはアンベードカルの写真と胸像、仏像などが安置されていた。



図7 茶毘所

ガイドのチャウラー氏が、アンクル・ブッダ・ヴィハーラという被差別地区に行ってみませんかと言うので、もちろん行ってみましょと答え、大通りでバスを降りて路地を歩いて行った。すると突然ドーンと爆発音がしたのでびっくりした。あとでわかったことだが、それはわれわれを歓迎する花火であった。

われわれはかなり大きな広場に案内された。広場の奥には屋根つきのパゴダがあり、仏像やアンベードカルの写真が置かれていた。驚いたことに、数十人が白装束の正装をしてわれわれを待っていてくれた。ほどなく広場には大勢の地区の人々が集まってきた。



図8 ムンバイの被差別地区

私が代表して大きな花束をもらった。チャウラー氏に通訳をしてもらい、マイクを握って挨拶をした。内容は、日本にもインドと同様の生まれに基づく差別があること、インドに来たのは7回目だが、来る

たびに人々の暮らしが豊かになっているのを実感すること、日本の伝統的仏教は形骸化していて葬式のみを行なう仏教になっていること、皆さんのように仏教に基づいて生活をし、解放運動をしているのを見ると、とても感動することなどである。

話の最後の、皆さんが仏教に基づいて生活し、運動していることに感激したというくだりでは大きな拍手をもらった。

3月25日、空路ムンバイからラジャスタン州ジョドプールに移動。

## 8. アンベードカル・ナガル訪問 (3月26日)

ハリジャン・コロニーと呼ばれる不可触民居住地区に案内された。地区の名前はアンベードカル・ナガル。「アンベードカル町」というほどの意味である。アンベードカルの名前を冠してはいるが、仏教徒ではなくヒンドゥー教徒の集落であった。この地区では、彼はヒンドゥー教の偉人と考えられていた。おそらくインドには、アンベードカルの名前を冠していても、実際はヒンドゥー教徒の集落がたくさんあるのであろう。彼は宗派を超えて不可触民解放の象徴的人物と見られているのである。



図9 ヴァンダナさん

この集落のリーダーはヴァンダナ (Vandana) さんという若い女性であった。原色の鮮やかな色のサリーを着ている。一般にインドの被差別地区の女性たちは、とても色鮮やかなサリーを身にまとい、おしゃれである。みずほらしい身なりの女性などほとんど見かけない。貧しくとも着るものには精一杯のお金をかけているのであろう。

以下はヴァンダナさんからの聞き取りである。

以前ビハール州などで不可触民の集落を訪れたときに、あまりの貧しさに愕然とした記憶があるが、この集落は家並みもきれいで、立派な家が多い。いつごろからこのような街並みになったのかと尋ねると、5~6年前からだという。アメリカなどに出稼ぎに行った者が仕送りして建てられたものもあると

いう。おそらく1991年に始まった経済の開放政策の影響がこのような被差別地区にも及んできたということなのであろう。



図10 地区の家並

住民の職業は清掃関係の公務員が多いとのことであった。カースト制度では、清掃は穢れに触れる賤業とされ、伝統的に不可触民の仕事である。月収は5,000~6,000ルピー（10,000~12,000円）とのこと。家の前で洗濯している女性を見かけたが、水道は各戸に完備されているという。オートバイが軒先に置かれている家も多い。一家の脚として購入する家が增えているのだらう。

小中学校の就学率は70~80%ぐらいだそうである。2~3割の子供が不就学ということになるが、親が子供に教育を受けさせない理由は、親自身が教育を受けていないため、教育の価値を知らないからだという。

結婚について尋ねた。親が子供の結婚相手を決める場合が依然として多いが、地区内で、自由恋愛で結婚するカップルも増えているそうである。興味深いことに他の地区（異なるカースト）との結婚が成立した場合、日本円で100万円の報奨金がもらえるそうである。どこがお金を出すのか聞き忘れたが、異カースト間の結婚によってカースト制度を撤廃しようとする努力が政策的に、とくに被差別民に対してなされているようであった。

地区を案内してくれたヴァンダナさんに彼女自身の結婚について聞いてみた。彼女の場合は恋愛結婚だったそうである。もちろん親も賛成してくれたとのこと。都市部ではカーストにかかわらず、自由恋愛に基づく結婚が増えているのが現状のようである。

地区の中には、子供たちの補習を行なう教室が設けられており、給食の設備もあった。この地区でも教育の充実によって職業選択の範囲が広がることこそ、差別からの解放の鍵だと考えられているのであろう。ヴァンダナさんに何を政府に望むか尋ねたら、子供たちがもっと教育を受けられるようにしてもらいたい、とのことであった。

## 9. レガール・カーストの人たちとの交流（3月26日 午後）

ジョドプールの不可触民のジャーティ、レガール（Reghar）の人たちからの聞き取りと交流を行なった。

われわれが案内されたのは、レガールの人たちが都会で学ぶ子弟のために造った寄宿舎のようなところであった。ちなみにレガールの人たちの世襲職業は、ラクダの皮をなめして靴などの皮革製品を作ることである。日本でも皮革業は死の穢れに触れる賤業とされ、典型的な被差別部落の産業となっている。

部屋の中に集まっていたのは、寄宿舎の管理人、市役所の職員、それに寄宿している学生たち、およそ総勢30名あまりであった。

冒頭、私から挨拶をさせていただいた。

ムンバイのアンクル・ブッダ・ヴィハーラで話したことと内容は一部重なるが、日本の仏教は、葬式のみを行なう宗教になっており、衰退していること、インドの仏教が、生活の中や解放運動の中で生きていることが私の目には新鮮であることなどを述べたところ、大きな拍手をいただいた。しかし後でわかったことだが、彼らはヒンドゥー教徒で、仏教に改宗してはいなかった。



図11 レガールの人たち

どういう若者たちがこの寄宿舎で寝泊りしているのか尋ねたところ、彼らは教育のレベルの高くないところ（地方の被差別地区）から来ているのだという。さらにこの寄宿舎は、若者たちが教育を受けることで、社会で認められるような人間に育てることを目的にしているという。おそらく彼らは最底辺のカーストに属し、ほとんど教育を受ける機会もない環境の中で暮らさざるをえなかった歴史を持っているに違いない。そのため教育こそが社会的な上昇の唯一の機会を提供してくれるとの思いがあるのだらう。そのことが、ジャーティ独自の寄宿舎を造って、都会の上級学校に通う若者たちを収容するプロジェクトを推進させたのであろう。

寄宿舎を運営する経費はどこから出ているのか

尋ねると、政府の援助は一切なく、寄付と寄宿生の寮費（月額300ルピー）でまかなわれているという。本当は政府から土地をもらって、自分たちで学校をつくりたいのだとも語っていた。

アンベードカルの肖像画が掲げられていたので、仏教に改宗しているのかと尋ねると、宗教はヒンドゥー教のままでという。では、アンベードカルはどのような人として理解しているのか尋ねると、インド憲法の草案を書いた人で、ありがたい人だという答えであった。彼の仏教改宗については、知らないとのことであった。ここでも、アンベードカルは不可触民解放の象徴的人物として知られてはいるが、仏教再興運動との関連で理解されてはいなかった。

学費について尋ねると、リザーベーション（保留制度：被差別民に対する優遇政策）のおかげで、半額だそうである。

大学卒業後この地区に住むかどうか尋ねると、ほとんどの学生が外国行きを希望していた。医学生などはとくに外国の病院で働きたいという。外国のIT関係の企業で働きたいという学生もいた。どこの外国に行きたいかと尋ねると、なんと日本に行きたいという学生がいた。なぜ日本かと尋ねると、彼は「日本人が前にいるから」と答えて皆の笑いを誘った。

恋愛は自由かと尋ねたところ、だめだという。恋愛したいなら、コミュニティーから出なければならぬのだという。ここはジョドプールの市街地にあるコミュニティーであるが、自由恋愛は許されていないことがわかった。カースト制度は都市部では崩れてきているといわれており、その核心には異カースト間の通婚がかなり自由に行なわれるようになってきている事実があるが、ここでは恋愛は禁止だという。おそらくここでは、ジャーティ独自の寄宿舎が設けられていることから見受けられるように、カーストの強固な紐帯が存在していて、それを維持するためにも恋愛は厳禁ということなのだろう。

こちらの一応の質問が済んだので、今度は彼らが日本について知っていることを尋ねてみた。すると、チャンドラ・ボースが日本に助けをもらった、という答えが返ってきた。日本では彼の名前は一部では知られているものの、それほど有名とはいえない。しかしインドでは、イギリスからの独立のためにたまたか偉人としてあまねく知られているのであろう。日本政府は周知のごとく、必ずしもインドの真の独立に賛同して彼を援助したわけではなかったといえる。だから日本が彼を援助したというような話

が出るたびに、少し面映ゆい気持ちになる。

ひとりの若者から、日本人はインドについてどう考えているか、と尋ねられた。

それに対して私は、今回でインドに来たのは7回目になるが、来るたびごとにインドが豊かになっていることを実感していると答えたところ、大きな拍手をいただいた。確かに97年の最初の訪問のときには、カルカッタ（コルカタ）などの都市には路上生活者があふれていたのに、今ではほとんど見られないこと、街並みも格段にきれいになっていることなど、経済発展の成果をいたるところで見ることができるところである。

日本についてさらに質問をしてもらったところ、どうして科学技術が発展して豊かになったのかと質問された。私は少し考えたあとで、法律がしっかりしていて、概ね守られたこと、人権、民主主義が機能したこと、公正な競争が行なわれてきたことなどを挙げた。するとまたしても大きな拍手をいただいた。おそらく私の答えが、インドが豊かになる条件として彼らが考えていたものと符合したためであろう。

チャウラー氏が付け加えて、日本人は真面目に仕事をして、正直だから豊かになったのだと主張した。彼の話では、たとえばインドの公務員は始業時間が9:00なのに、11:00ごろ出勤するのが普通だそうである。ちなみにモディ政権が公務員の出勤時間を管理する機械を導入したところ、彼の政党（BJP）の候補者が、そのことが主な原因で選挙に敗れたのだそうである。チャウラー氏が言うように、日本が豊かになった原因として、官僚機構が懸命に国益を追求して、比較的役人の腐敗が少なかったことも大きいと言えるであろう。

では、なぜインドにこのようなひどい官僚主義が残っているのだろうか。インドでは、1991年まで社会主義的な政策が続けられた。経済の主要な部分を国有企業が占め、一般企業にも自由な活動は認められなかった。企業が何をどのように、どれだけ生産するかなどの許認可権は、すべて国家（官僚機構）が握っていた。許認可権が、政策に一貫性のない気まぐれな役人に集中したために、許認可を得ようとして役人への賄賂が横行した。

また自由経済を拒否し、外国資本の流入を制限したために、インドに先端技術が導入されることはなく、生産活動は停滞し、国全体に貧困がはびこった。1991年からの経済の開放政策で多くの国民が貧困か



ら抜け出したが、社会主義の負の遺産ともいえる官僚主義と賄賂は、いまだにインドを苦しめているのである。

私は、日本では公務員を含め、職場に遅れて行く人などいないこと、日本人は、たとえば製造業の現場では、油にまみれ真っ黒になってモノづくりをすることが誇りであり、喜びであることなどを語った。

インドには、これもカースト制度の一面なのだが、手や体を使って働くこと自体が下層階級（低カースト）のする仕事として賤視されている現実がある。職人芸が「匠の技」として称賛される日本とは大違いである。これが、インドの製造業がなかなか発展しない大きな原因と考えられている。一層の経済発展のためにも、カースト制度の打破は避けて通ることはできないであろう。

日本にもアンタッチャブル差別はあるか、との質問があった。

私は、日本にもカースト制度に似た差別があること、たとえば皮革業は伝統的に被差別民の仕事であること、日本の差別問題の原因を解明するためにもインドに来たことなどを語った。そして日本には結婚などに根強い差別が残っていることも付け加えた。

出席している大人たちに、子供たちが大学卒業後地区に戻ってきてほしいかを尋ねてみた。するとひとりの大人が、教育を受けた後にどこに行ってもいいが、ルーツを忘れないでほしい、と答えた。この地区出身で、アメリカに住んで大成功を収め、この施設に多額の寄付をしてくれている人がいるのだという。ここで作った革製品をアメリカで販売して財をなしたのだそうである。この若者にはそのような人物になってほしいとのことであった。

ひとりの大人が、われわれの仕事（寄宿舎の運営）をどう思うか、と尋ねてきたので、次の世代を育てる素晴らしい仕事だと答えると、また大きな拍手をいただいた。

## 10. ギルダールブラ訪問（3月28日 午後）

チャウラー氏の友人の紹介で、ジャイプールの被差別地区、ギルダールブラ（Girdharbura）を訪れた。この人口は4,000人ぐらいで、いろいろな不可触民のジャーティが混住する地区だという。住んでいる人々のジャーティを尋ねると、バグリア、スペラ、バルミティ、クマールなどであった。このうち

スペラは蛇つかい、クマールは陶器製造が伝統的職業である。

この地区での聞き取りが終わってから、蛇つかいの方を紹介されたが、彼から意外な話を聞いた。大道芸が政府から禁止されたので、今では蛇つかいをやめて、興行関係の仕事に就いているという。インドが近代化されたのを内外に示すために、政府は大道芸を路上から一掃しようとしているのだろうか。今回の旅でも、実際にはジョドプールの城の前で蛇つかいの芸を見ることができたが、このような伝統芸能がまもなく見られなくなるのかもしれない。



図12 スペラの男性

かなり立派な家が立ち並んでいるので、建築に政府の補助があるのかどうか尋ねると、全部自分のお金で新築したとのこと。ジョドプールの地区のところでも書いたが、現地研修で1990年代に訪れた被差別地区の様子とは雲泥の差である。おそらく当時訪れた地区の中にも、立派な家並に生まれ変わっているとところがたくさんあるに違いない。

この地区にはたくさんの不可触民のジャーティが暮らしているが、異なるジャーティ間の結婚はあるのか尋ねてみた。一切ない、との答えが返ってきた。ムスリムが鍛冶屋を営んでいるが、ヒンドゥー教徒との通婚もないとのこと。ほとんどの結婚相手は親が決めるが、たまに恋愛結婚もあるそうである。

子供たちはほとんどが小中学校には通っており、30～40%は高校に進学するとのこと。大学まで進学するのは、地区でほんの数人だそうである。

子供の95%は親の職業を継ぐという。残りの5%は教育を受けて、地区を出て行くそうである。

異なるジャーティ間の結婚はないということ、ほとんどの子供たちが親の職業を継ぐということからすると、ここではカースト制度の縛りは非常に強固であるといえる。

地区の住民が一番困っているのは何かと尋ねたら、やはり仕事がないことだという。日雇いで、ごみの収集などの仕事が多いが、日当は300～350ルピー（600～700円）ほどだという。しかし暮らし向

きは少しずつ良くなっているそうである。

地区に仏教徒がいるかどうか尋ねると、いないとの答え。アンベードカルを知っているかと尋ねると、インド憲法をつくった人だ、との答えが返ってきた。彼の名前は広く知られているものの、仏教との関連や不可触民解放運動の指導者としては知られていないようであった。

最後に差別を受けているかどうか尋ねると、一切ないとの答えが返ってきた。他のカーストの井戸水を飲むことにも問題はないという。結婚についても、異ジャーティ間の通婚はないが交流はあるし、お祭りも一緒にやっているとの答えであった。

### あとがき

全国大学同和教育研究協議会のインド・カースト制度現地研修も今回の旅で8回目を数えたが、この研修旅行も大きな節目を迎えたように思う。一言でいえば、インドに「差別と貧困」を体験しに行く旅が終わりを迎えたのではないかということである。

まず、インドが急速な経済発展を遂げ、被差別地区もかつてとは比較にならないほど豊かになったことが挙げられる。1997年にカルカッタに初めて足を踏み入れたとき、膨大な数の路上生活者を目の当たりにして大変なショックを受け、また被差別地区のあまりの貧しさに目を覆うことも多かった。しかし上記のレポートにもあるように、近頃の被差別地区の現状は、インド全体と比べて豊かとはいえないまでも、かつての地区の有様とは雲泥の差である。

同じ地区を訪れて定点観測しているわけではないので正確なことは言えないが、不可触民の生活が大幅に改善されているのは間違いない。初めのころの研修旅行には、参加者が日本から古着や文房具などを持って行って現地で寄付するのが慣例となっていたが、今回の旅では一切それをしなかった。かつては歓迎会の後で、仕事を休んで歓迎したのだからという理由で一定の金額を要求されることもあったが、今回はそれもなかった。

それでも、以前にも増して彼らはわれわれを大歓迎してくれた。以前の歓迎会には、貧困にあえぐ被差別民が、外国人の訪問を機に少しでも金銭的、物質的な援助を期待する部分があったが、豊かになるにつれて心から外国人との交流を楽しむものに変ってきたということなのであろう。今後も研修旅行を続けるとすれば、被差別民の貧困と差別の実態

を見て、日本の差別問題を考えるヒントを与えてもらうという従来の考えから、インド人との交流を通して、被差別民を含めたインドの現状を見て交流を深めるものに変わらざるをえないように思う。

折しも今年7月8日に、この旅を最初に企画し、長年団長を務めてこられた全国大学同和教育研究協議会の初代副会長、沖浦和光先生が亡くなられた。先生は、筆者がインド・カースト制度や部落問題など差別問題に関心を持つきっかけを与えてくださった方であり、逝去の知らせは悲しく、残念なことではあるが、同時にこれがひとつの時代の終わりを告げているような気がしてならない。インドは大きく変わったのだ。われわれがどのように変わればいいのか筆者にはまだ明確な答えは出せていないが、インドに関わるわれわれの眼差しも変革を迫られているのである。